様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：１３８０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ０２４３６

研究課題名（和文）乳児と保育者及び養育者間の音声コミュニケーションに関する音楽的研究

研究課題名（英文）A musical study on speech communication between infants and child carers and caregivers

研究代表者
石川　眞佐江（ISHIKAWA, Masae）

静岡大学・教育学部・准教授

研究者番号：８０４３６６９１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では主として2歳～3歳の幼児が既存の手遊びの獲得過程について研究を進め、以下の点が明らかとなった。
2歳児においては歌唱が先行し、次いで身体運動が獲得される。身体運動の中では「身体接触」部分から先行して獲得され、次に「単純な要素」部分が獲得される。また「クライマックス」部分の獲得は早い段階で行われる。モデル提示者がいる場合は身体運動は拍に遅延することが多いが、不在の場合拍との同期は比較的正確に行われる。 3歳児においては、単純な動作とクライマックスの獲得が先行し、イメージに基づく複雑な動作部分は改変を加えて子どもなりに再現される。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究においては、新型コロナウィルスの感染流行の影響を受け、当初の予定通りのデータの収集について困難が生じたため、手遊び歌に焦点を絞り、その獲得過程について研究を行った。
手遊び歌は、広く子育てや保育の現場で使用されているが、その教育的意義についての議論は不十分である。手遊び歌には音楽的要素のほか、コミュニケーション的要素、身体運動要素などさまざまな発達にかかわる要素がある。今回の研究において、そのコミュニケーション的側面が音楽に支えられて成立する過程の一端を明らかにすることができ、今後の保育や子育ての場において手遊び歌を活用する際の意義を示すことができたと考える。

研究成果の概要（英文）：In this study, we mainly studied the process of acquisition of existing hand games by 2- to 3-year-old infants, and the following points became clear.
In 2-year-old children, singing is acquired first, followed by physical movement. Among the body movements, the "body contact" part is acquired first, followed by the "simple element" part. The "climax" part is acquired at an early stage. When the model presenter is present, body movements are often delayed to the beat, but when the model presenter is absent, synchronization with the beat is relatively accurate. In 3-year-olds, the acquisition of simple movements and climaxes precedes the acquisition of complex movements based on images, which are reproduced in the child's own way with modifications.

研究分野：音楽教育　幼児教育

キーワード：乳幼児　手遊び歌　獲得過程　コミュニケーション　音楽性

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

近年、乳児を対象とした研究が進むにつれ、様々な乳児の能力や発達の過程が明らかにされてきた。誕生直後から始まる音声を介したコミュニケーションは、主としてこれまで乳児の言語発達および母子相互作用という観点から研究されてきた。また、養育者が用いる、マザリーズと呼ばれる高く抑揚のある対乳児音声についても、それが乳児に選好されることや、乳児と養育者のコミュニケーションにおいて重要なものであるということが明らかになっている。Malloch と Trevarthen（前掲）はこの人間の根源的なかかわりを支える「音楽性」について発達心理学、教育学、脳科学、医学など様々な視点からアプローチしている。しかし、日本の乳児・養育者を対象とした研究は未だほとんど行われてない。

本研究の学術的問いは「乳児と養育者間の音声コミュニケーションに顕在する音楽性とは何か」というものである。先に述べたような「音楽性」という概念を用いて乳児と養育者の音声コミュニケーションを捉え直し、そのかかわり合いに現れる音楽性の諸相と、それがコミュニケーションにおいて果たす役割に着目し、音楽的および教育学的な意味を明らかにしようとするものである。

２．研究の目的

本研究は、乳児と養育者との間にどのような音声を介したかかわりが生成されており、そこにどのような音楽性が存在するのか、またその音楽性がコミュニケーションにおいて果たす役割について、観察及び実験と音声分析、音楽的分析などを通じて音楽的および教育学的な観点から明らかにすることを目的とした。

本研究の研究開始時におけるテーマは乳児と養育者の音声コミュニケーションであり、当初の計画では、低月齢の乳児から言語獲得の始まる１歳程度を目安に、その音声行動と養育者とのやりとりを音楽的に分析することを予定していた。しかしながら、2020 年より始まった新型コロナウィルス感染症の流行のため、当初予定していた乳児と養育者の音声コミュニケーションデータの収集が困難となり、研究計画を大きく変更することを余儀なくされた。

そこで、新型コロナウィルス感染症への対策をしつつ、実施できる範囲での可能なデータ収集の方法と研究の主眼について方向修正を行った。そこで、ビデオ録画、動画記録の提出等によるデータ収集が比較的行いやすいことを条件に研究の範囲を検討し、低年齢の幼児と養育者間の遊び歌の提示と模倣という点に絞ってデータ収集を行うこととした。本研究においては、主として 1 歳～3 歳の幼児が既存の歌遊びをどのように獲得していくのかについて中心に研究を進めた。

３．研究の方法

静岡県内および東京都内において、１歳後半～３歳の子どもとその養育者を対象とし、計８組のペアの協力を得た。また、３歳児については、静岡市内保育園において、在籍園児５名を対象として研究者により手遊びの実践を行った。対象の子どもの未知の手遊び歌を継続的に提示してもらい、その様子を動画によって記録した。同じ手遊び歌を日にちをおいて何度も行い、その都度の子どもの手遊びの再現の様子について分析を行った。

４．研究成果

研究の結果、1-2 歳児の手遊び歌の獲得においては、以下の点が明らかとなった。

一点目に、2 歳児の遊び歌の獲得は歌唱部分の獲得が先行し、次いで身体運動（振り付け部分）が獲得される。歌唱部分の再現は、データ収集時のみならず、幼児の日常生活においても断片的にあらわれるが、それに身体運動（振り付け部分）が付随することは少ない。ただし、その歌唱断片を契機として、養育者との間で自然発生的に身体運動（振り付け部分）を含む手遊びの再現が行われることがある。

二点目として、身体運動（振り付け部分）の獲得は遊び歌において手を合わせる、くすぐる、手をつなぐ、など、養育者との「身体接触」部分から先行して獲得される。次いで手拍子や膝打ちなどの比較的「単純な要素」部分が獲得される。ただし、単純な動作であっても、一拍置きの手拍子や、左右交互の手合わせなどは正確な獲得が難しい。

三点目として、注視についてである。手遊び歌提示初期においては、モデル提示者（養育者または実践者）の手元注視が多くみられるが、獲得後はモデル提示者の顔注視に移行することが多い。翻って、子どもによる自分自身の手元注視はほとんど行われない。

また、手遊びの歌の最後に、くすぐりやジャンプ、大きな動作などのいわゆる「クライマックス」部分をもつ手遊び歌に関しては、他の部分に比して「クライマックス」部分の獲得が先行して行われることが明らかとなった。また、クライマックス部分は、歌の全体の中で、フライングして動作が行われることも多い。

また、モデル提示者がいる場合、身体運動は本来の音楽の拍に対して、やや遅延して行われる

ことが多いが、モデル提示者が不在の場合、拍との同期は比較的正確に行われる。これは、モデル提示者がいる場合、モデル提示者の動作を見てから自分も動くため、本来の音楽の拍からは遅延していくが、ひとりで行う場合は、すでに獲得している部分については、音楽の拍に同期することができていることが多い。

また、3 歳児の手遊び歌の獲得過程の特徴としては、単純な繰り返し動作とクライマックスの獲得が先行し、イメージに基づく複雑な動作部分は比較的幅を持つ改変を加えて子どもなりに自由に再現されることが明らかとなった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	村上　康子 (MURAKAMI Yasuko) (20458863)	共立女子大学・家政学部・教授 (32608)	
研究分担者	市川　恵 (ICHIKAWA Megumi) (70773307)	早稲田大学・教育・総合科学学術院・講師（任期付） (32689)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関